

「今日はお弁当だね。あのね～、ウィンナー入っているんだよ」とAちゃんが私の顔を嬉しそうに見上げます。お母さんの作って下さったお弁当が楽しみでしかたがないという気持ちが伝わってきます。お弁当や手をつないで歩くこと、お母さまの背中を感じながら自転車で風を切って登降園する時間・・・幼児期にお母さま（もちろんお父さま、ご家族）のいっぱいのお愛に支えられて過ごしている子どもたちは幸せです。

心は確実に大きくなっています

保育の視点③より

— 好きな遊び、好きな場所、好きな遊具を見つける —

登園したBちゃんはお母さんに身支度を見届けてもらい、何回もお母さんの後ろ姿に手を降ると、入り口の戸にもたれながら部屋の様子をじっと見えています。Bちゃんの視線の先には粘土をこねている子ども、作った蝶々の羽を保育者に背中に貼ってもらっている子ども・・・などがあります。見回しながら、スモックの裾をいじっています。私はしばらくBちゃんの様子を見ていましたが、「Bちゃん、何をして遊びましょうか？」と声をかけました。Bちゃんは私をちらっと見ると「いいの」と言います。私は、はさみで紙を切っているCちゃんの所に行き、「切れない」と言うCちゃんに手を添えて紙を切ることを助けていました。しばらくするとBちゃんがゆっくりと近づいてきました。そして私の腕をポンポンとたたくと小さな声で「ぼくも同じの作りたい」と言います。「どうぞ、紙はここにあるわよ。何色がいいかしら」と声をかけました。Bちゃんは青い紙を「これにする」と手にとると、はさみを握り、「いっしょに切って」と言います。「いいわよ。いっしょにしましょう」私は手を添えていっしょに線をなぞって切ります。切れるとBちゃんは穴をあけ、「ひもをつけたい」と言



います。私が糸を穴に結ぶとその糸の先をそっと持ち上げました。糸を引っぱって歩きながら私を見てにこっと笑います。

大人目から見ると歯がゆくなるような動き出しですが、じっと友だちがしていることを見て自分で動き出す時が守られていることが子どもの成長にとってとても大切なことだと感じます。子どもにとって“見て迷っている時間”は大人にとって“待つ時間”です。この時間が心を育て、大人と子どもの信頼を深めます。

思いを表したり、気持ちに折り合いをつけることを経験しています

— 安心して過ごす中で自分の思いを表現する —

じゅうたんの上でDちゃんとEちゃんがレール汽車をしています。「あざみ野まで行くことにしよう」「じゃあ、これは駅ってことね」などと言いながら二人はしばらく線路をつなげたり周りに積み木を並べたりしていました。線路がつながってくると「あっ、電車、電車」と言って電車の箱から電車を取り出し線路を走らせます。

しばらくすると庭にいたFちゃんが部屋に戻ってきました。Fちゃんはじゅうたんの上の線路を見つけて「長いなあ！」と声をあげました。二人は線路に電車を走らせていてFちゃんには気がつきません。ちょうどFちゃんには背を向けていたのです。Fちゃんも長くつながった線路に気持ちが向いていて二人にはあまり気がついていないようです。「もうちょっとつなげようかなあ」と言うとFちゃんはあっというまに線路を二本ほど取ってしまいました。私もそばにいたのですが、あっと思ったときにはつながった線路が崩れてしまいました。

その時です。電車を走らせていたDちゃんが振り向きました。そしてFちゃんに気がつき、「あっ、ぼくが作っていたのにいけないんだよ。だめだよ」と言いました。「いいじゃない」とFちゃんはもう一本の線路を手に取ります。「だめだよ」とDちゃんは止めようとしてしました。その力に勢いがつき、Fちゃんを押してしまいました。Fちゃんは倒れ、「うわーん」と泣き始めました。「だってぼくが作ったのこわしたんだよ」とDちゃん。「こわしたんじゃあないよ。違う線路にするんだよ」とFちゃん。私はあいだに入りFちゃんに「この線路、DちゃんとEちゃんが作っていたのよ」というと「だれもいなかったよ」とFちゃんの怒った声が返ってきました。「ぼくたちいたよ」と二人も怒っています。「Fちゃんには見えなかったけれどDちゃんとEちゃんが遊んでいたのよ」と説明をしても「いやだ、ぼくも使いたい」「押さないでよ～」とFちゃんは泣きながら怒っています。「Fちゃんにこわされちゃって嫌な気持ちだったけれど押すのはいけないわね」と言うと「だって・・・」とDちゃん。二人にはFちゃんはだれもいないと思って使ってしまったこと、怒りたくても相手に痛みを与えてはいけないことを伝えました。FちゃんにはDちゃんとEちゃんが使っていたこと、勝手に使われて悲しかったこと、止めようとして押してしまったこと・・・を伝えました。「押しちゃってごめんね」とDちゃんは言いましたが、Fちゃんは「使いたいの」と繰り返すばかりでした。

友だちと過ごす中には家庭では起こらないようなことが起こります。その場では解決しないことも



あります。やがて「いれて」と言ったり、「ごめんなさい」ということを知り、自分の気持ちに折り合いをつけられるよう、経験を重ねて行ってほしいと思っています。時には思いとっしょに手が出てしまうこともあります。大きなケガにならないようには配慮しますが子どもたちが関わりながら自分の体と思いをコントロールできるようになる時を待ち望み、繰り返し支えていきたいと思っています。

(永瀬真澄)